

2013年11月14日岡田博美ピアノ・リサイタル（於：東京文化会館小ホール）を聴いて
石井元章

今回『ロンドン便り』執筆の白羽の矢が立ってしまったのは、コンサート後の岡田さんを囲む食事会で、興奮のあまりにあらぬことを口走ったからだと推測しています。未熟さ故に気持ちの高まりをそのまま吐露してしまいましたが、同じような興奮をあの場にいた「岡田博美を後援する会」の人々の多くが感じていたのではないのでしょうか？ それほど、あの晩のプログラムはそれぞれの人が一家言ある曲の集まりだったと思います。事実、私も曲目を知った途端に授業を休講にしてでも大阪から駆け付けようと思いました。以下、いくつか勝手な感想を述べさせていただきます。

ショパン作曲『バラード第3番 op.47』は、間に休符が入るメロディのフレージングを手の重心移動でどう歌うか、また後半の困難な音型をどう弾きこなすかが難しいのですが、岡田さんは洗練されたモチーフに満ちたこの難曲をその技術で難なく弾きこなすだけでなく、左手が動き続ける中間部においてしっかりとメロディを浮き立たせ、かつ「制御された *mf* (メゾフォルテ)」で聴かせてくれました。*mf* を制御するのは至難の業ですから、まさに脱帽です。フランス語でバラード *ballade* (譚詩曲) と呼ばれるこの曲は、イタリア語では *ballare* という動詞の過去分詞が名詞化した *ballata* と呼ばれます。この動詞には「踊る」という第一義の他に「揺れる」という意味があり、心の情動が表現された楽曲がバラードに他なりません。半音階で下降する左手が表す「情動」を見事に「制御」した岡田さんの演奏は、鮮烈に私の心に残りました。

ブラームス作曲『パガニーニの主題による変奏曲 op.35』が技巧の勝った変奏曲であることは万人の認めるところですが、岡田さんの演奏はこの曲がまるで簡単なものであるかのように聴かせてくれました。あまりの驚きに眼は見開き、開いた口は塞がらない状態でした。Bravo!

後半は一転してシューマンの深い内面を見せてくれました。『森の情景 op.82』は珠玉の小品集ですが、その美しさを岡田さんは詳らかに聴かせてくれました。特に第3曲『寂しい花』は岡田さんのこの曲に対する愛情がひしひしと伝わってくる名演でした。食事会でこの愛情をご本人の口から直接確認できた時には、してやったりという気持ちでした。原題 *Einsame Blumen* は「離れた所に群生する花々」ですから、ただ感情的に「寂しい」というのではなく、互いに思いやり慈しみがらひっそりと咲く花々を *d-f-es-d* の音形の繰り返しで表したのだと思います。その慈しみを岡田さんが愛情込めて丁寧に弾いていらっしやるのが印象的でした。

『クライスレリアーナ op.16』はパリで邂逅した「友人」ショパンに捧げられた曲集で、その意味で前半とのつながりが強く、この演奏会を締めくくるのに相応しい曲集だったと思います。難曲揃いの『クライスラーに関する事ども』の中で、眼が皿のようになってしまったのは第3曲でした。Sehr aufgereggt (大いに興奮して) で始まり、コーダでは noch

schneller (いっそう速く) の指示のあるこの曲を岡田さんは最初から驚くばかりの早さで始めました。どうなるのかと思っていたら、あの長い指が 5cm 以上も伸びたのではないかとと思われるほど高速で動いて曲を弾ききったのでした。しかし、何と云ってもはっとしたのは、**sehr langsam** の第 6 曲から **sehr rasch** の第 7 曲に入る時でした。**attacca** (襲って) の指示は無いのに、岡田さんは会場にも聞こえるほどの息を吸い込み、「大変性急に」入って行きました。それはまさにシューマンの意図した事だったと言わざるをえません。**schnell und spielend** の終曲(「チャンパ節」とは言い得て妙!)を聞きながら、心の中ではコンサートが終わらないでほしいと祈っていました。アンコールはメンデルスゾーン『無言歌集』より『春の歌』、リスト『愛の夢第 3 番』とシューマンの『トロイメライ』で、1809 年生まれのメンデルスゾーン、1811 年生まれのリストと振れた曲目が最終的に 1810 年生まれのシューマンへと収斂するように構成された様は、今回の演奏会における岡田さんの関心が、『クライスレリアーナ』の作曲家に向けられていたことが明らかに見て取れました。興奮に満たされた心は、しかし『トロイメライ』によって鎮められ、満足して会場を後にすることができました。